

説教 「私を愛し、私のために」 山本 護 牧師  
聖書 レビ記 19：10／ガラテヤの信徒への手紙 2：19～20

去る10月31日は宗教改革記念日で、今年はちょうど五百年目に当たる。宗教改革によってプロテスタント教会が誕生したわけだが、これを「新教」と呼ぶことがある。改革当初から、新教と呼ばれることに対してカルヴァンは、くり返し否と言ひ、「在るべき本来の姿に戻っただけだ」と答えている。

信仰の「在るべき本来の姿」を改めて見つめ、私たちプロテスタント教会の柱を確認しよう。

「わたしは、キリストと共に十字架につけられている(ガラテヤ 2:19b)」。この言葉は、詩心による角度をつけた表現ではない。パウロにとって、「律法に対しては律法によって死んだ(2:19a)」ことによる、解放されたリアリティであった。

彼は「熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者だった(7リビ° 3:6)」が、今は「キリストと共に十字架につけられている」。

それまで貫いてきた神に喜ばれる(であろう)心構えや行いが、「律法によって死んだ」がゆえの自由。

「律法」自体は元々、神がイスラエルの具体的な歴史を通して与え給うた、神に従って生きるための規範。その内容は、強者の横暴や専制を許さず、あらゆる弱者を守って共に生きるための、現実に即した厳しい決まり事であった。次のようなきめ細かな律法からもその根拠が分かる。

「穀物を収穫するときは畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である(レビ 19:9~10)」。

イエスが「安息日は、人のために定められた。人のために安息日があるのではない(マルコ 2:27)」と言ったように、主の律法は人のためにある。

さらにイエスは「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである(マタイ 5:17)」とさえ語る。

必死の努力で何とか納まる律法は「律法によって死んだ(ガラテヤ 2:19a)」。それゆえに「キリストがわたしの内に生きておられる(2:20a)」。

「わたしを愛し、わたしのために身を献げた神の子(2:20b)」がまずおられ、「わたし」がその神の子によって「信仰」を戴く。

信仰は「わたしを愛し、わたしのために」の十字架によって「一人ひとりのもの」となる。これが「恵みのみ、信仰のみ」の宗教改革の信仰。

パウロは確信を持って「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた(2:20b)」と語る。客観的には「私たちを」であろうが、己が実感からすれば「私を」に他ならない。

教会の教義なら「私たちを」だが、そんなしゃらくさい人為ではない。「私を」という実感こそが誠実で、そうであってこそ人間は転換(悔い改め)しうる。

この場合「私は」ではなく、「私を」が要諦(ルカ 18:11~13)。「私を」愛して下さるキリストによって、苛烈な迫害者は忠実な使徒に転換し、未知の異邦へ向かう(ガラテヤ 2:9)。

親鸞の弟子唯円もこう書いた。「聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよく、案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり(歎異抄)」。真のリアリティとは、こうした迫力あるものなのであろう。



《おまけのひとこと》

この片隅の この小さな事情に応じて働かれる聖霊 「よく、案ずればひとへに私一人がためなりけり」と思うほどに 十字架もまた 世の罪を負って というより余の罪がために これが実感